

シピボ - コニボ土器の製作と破損

ウォーレン R. ド・ボーア

(ニューヨーク市立大学クイーンズ・カレッジ人類学部)

ドナルド W. レイスラップ

(イリノイ大学アーバナ分校人類学部)

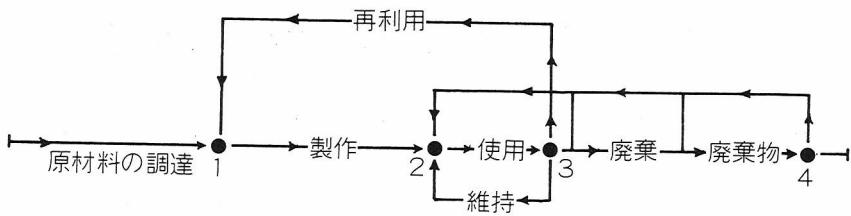
訳・松田順一郎

ド・ボーアとレイスラップの両氏は、東部ペルーのシピボ-コニボ族の土器インダストリーについて論究した。その中で現代の行動体系における物の流通を考古学的資料との関連で記述している。両氏は、原材料の調達、土器製作、土器の世帯における分布、土器の基本的な機能と二次的な使用、および土器廃棄のパターンを論述している。ハーディン M. A. Hardin のように、分類を基本的な問題としていないので、土着の分類の呼称法とりわけ、それは土器の機能に関連した) や土器製作者間の変異性 variation 関する有易な情報を提供している。土器の使用とその変異性の寿命、そして土器が考古学的な遺物となるプロセスにこの論文の観点はあるので、現在進展しつつある考古学的資料の形成の過程解明に対して光を投じるであろう。さらにそれは考古学的な資料のサンプリングに関する系統化にも示唆するところがあろう。(訳註1)

筆者のはしがき この報告は、ドナルド・レイスラップによって1956年に始められた。上部アマゾン文化史長期調査計画の一部分である。われわれのシピボ-コニボ民族誌調査は、フルブライト・コミッション、国立科学基金、ニューヨーク市立大学研究基金などを含む多くの公機関の寛大な援助をうけた。また、特に感謝にたえないのは、シピボ-コニボ族の首長たちの歓待と協力そして忍耐が有易な情報の収集とともにフィールドワークを楽しいものにしてくれたことである。

考古学者というものは時間に疎外されるのがつねである。理解しようとする過去の文化行動は、彼には決して出会うことのないものだ。タイムマシンのかわりに、理解を助けてくれるのは他ならない。文化行動が物質的な副産物by-productを生む事実、そしてこの副産物を生み出すパターン化された行動を推測する仕方で、副産物の考古遺物もまたパターン化されているという前提なのである。しかしながら、この前提自体は一つの問いかけとして置き換えることができる。つまり、文化行動とその考古学的な表示の関連の本質はいったい何なのか。この問い合わせして、考古学では、これまで、認識論的な基礎づけに倣する体系的な検討がなされていないようと思われる (Ascher 1961, 1962, 1968; Chang 1967; David and Hennig 1972; Schiffer 1972, 1975)。

実際われわれの過去への理解の試みは、異った文化現象を比較してしまって、短絡したものなのである。ここでわれわれは、今日の文化行動の民族誌的観察と、過去の行動の副産物に対する考古学的観察とを比較するのである。もし、われわれの目標が過去の文化行動の理解であるとするならば、このような比較は、行動とそれに由来する考古学的表示との間に、相関的で



第1図 文化システム内の人工作物の動きを示すフローチャート、数字がつけられた分節点は、そこで貯蔵（時間的な移動）ないしは、輸送（空間的な移動）が起る個所を示している。シファー（1972：fig.）を修正した。

明白な同形性isomorphismが存在するという仮定を擁護することになるだろう。もし、この同形性が、ほとんどの場合存在しないということが示されるならば、考古学者は次の2つの特殊な状況においやられてしまうだろう。つまり彼は、過去の文化行動は現在の文化行動についてのわれわれの知識を基準に「読まれる」過度に拡大された斉一主義uniformitarianismの擁護者になるか、さもなくば、行動の理解を全く回避して、行動の真空状態の中で、行動の副産物を評価しようとする「遺物の物理学」artifact physicsに奉仕せざるをえないだろう。このことは、誤った方法論で、重要な研究を実施するか、あるいは方法論的には無難だが、とるに足りない研究で満足するか、というふたつにひとつの板ばさみに追いやられることになるのである。

このディレンマの状況において、今日の共同体の考古学的資料の研究の重要性は明白である。そこでは、行動とその考古学的な痕跡は両者とも観察可能であるから、両者の関連性が同形性の一つ、つまり「化石化」fossilizationしていると推定するよりも、むしろ両者の相関関係を論定することが可能となる。このような詳細な記述は類似していると考えられる諸要素の比較のための基礎作業となる。この諸要素とは、それらを生み出した行動体系の変換としての現在と過去の考古学的資料のことである。

この論文の中で、われわれは、ペルーアマゾンのシピボ-コニボ・インディアンShipibo-Conibo Indianの土器インダストリーについて、若干の素描と要約を提示しようと思う。われわれの目的は、行動の副産物の特定の次元にあらわれる形態とその分布のパターンを行動との関係性で論定することにある。この目的のために、われわれは、シファーSchiffer (1972) が文化体系の中の生産物の流通について展開した一般モデルに従って、われわれの観察を方向づけてゆくことが有効であると考えた。シファーのモデルを幾分修正して第1図に示したように、この図は行動体系における生産物の流通のコンテクスト—原材料の調達、文化形態として未加工材料を転換する製作行動、製作品の使用と再利用、残存物の形態としての考古学的資料をうむ終局的な廃棄といった、幾つかのシーケンスを考古学的資料としてプロットしたものである。それでは、まず最初にシピボ-コニボ族と彼らの土器について手短かに紹介しておくことにしよう。

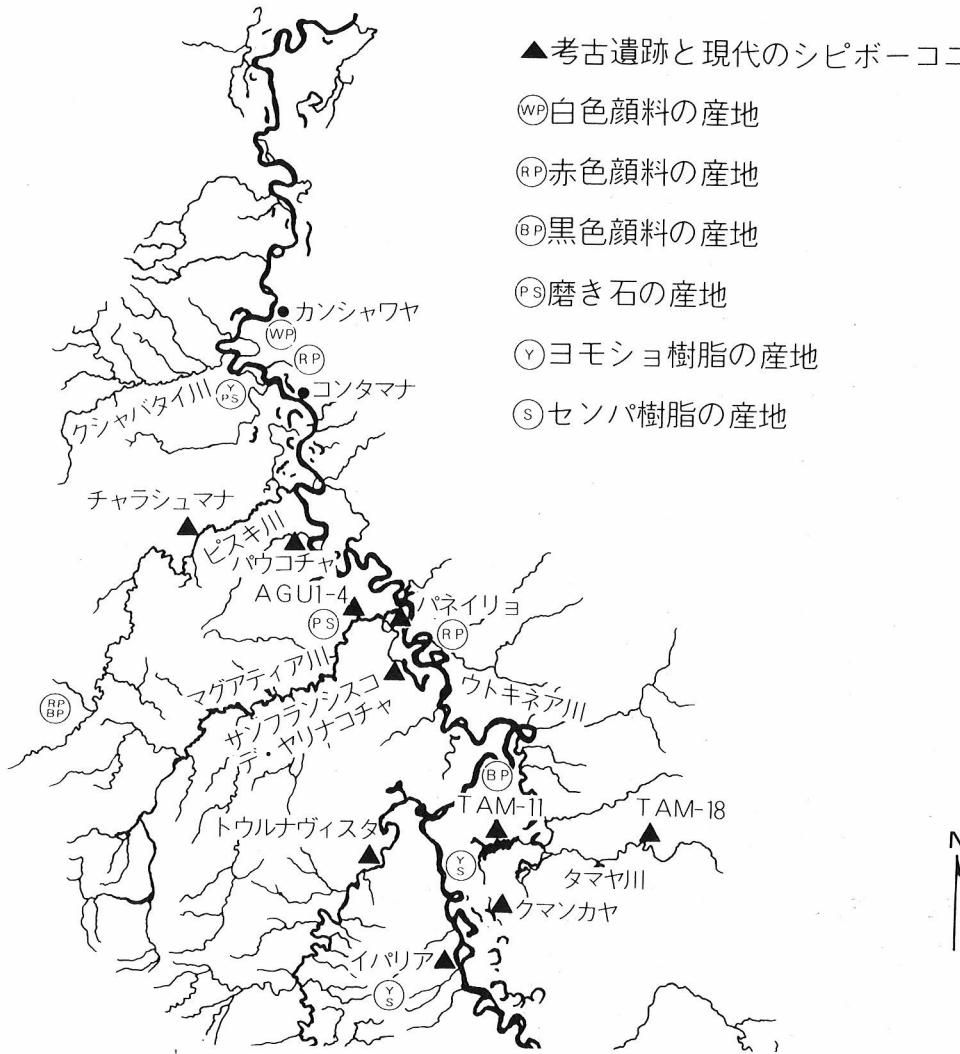
シピボ-コニボ族と彼らの土器

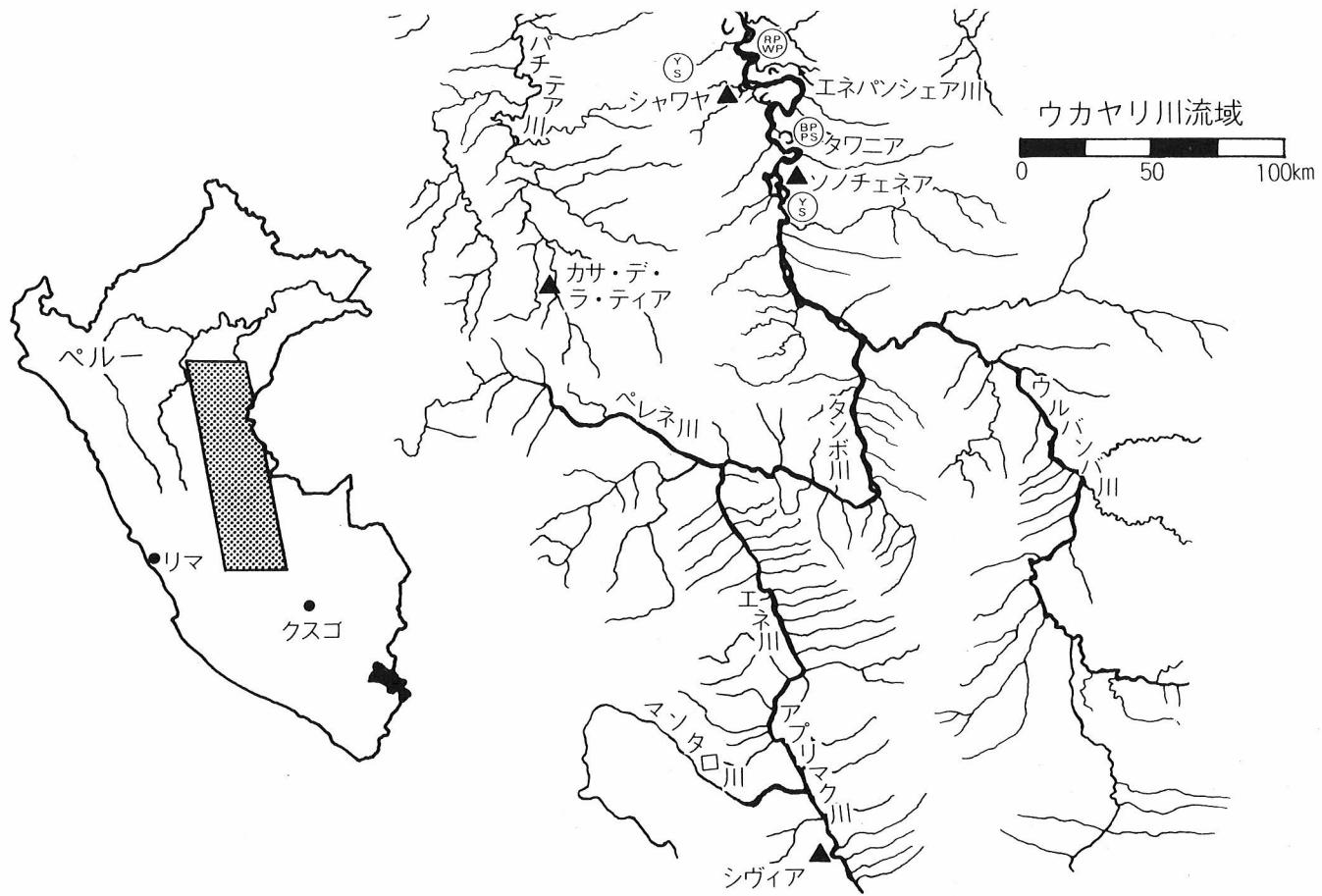
シピボ-コニボ・インディアンは、ペルー・アンデスの東山麓を北に向って流れている。アマゾン川南部の大きな支流、ウカヤリ川R. Ucayali流域の熱帯雨林に居住している（第2図）。シピボ族は、パチテア川R. Pachiteaの北部、ウカヤリ川の中流に占住し、彼らと言語的にも文化的にも親密な隣人であるコニボ族はウカヤリ川の上流、パチテア川の南部に住んでいる。集落はふつうウカヤリ川主流の堤に沿って営まれるか、肥沃な農耕地、豊富な水産物と河岸の動物相をもたらす氾濫原の縁にある崖上に位置している。ピスキPisquiやタマヤTamayaのような主要な集落もこのような立地にある。生計をたてる主な産物はプランティン、バナナ、マニアック、トウモロコシと魚類である。集落の規模は多種多様である。ペルー人都市であるプカルパPucallpaから、ほんの2時間のところに位置するサンフランシスコ・デ・ヤリナコチャSan Francisco de Yarinacochaには、1000人のシピボ族が住んでいる。他の多くは、約100人の住人がいるパネイリョPanaillo（Bergman1974;26）とか、55人のシャワヤShahuaya（Bodley1967:12）のような中規模の共同体をつくっている。例えば、ウカヤリ川上流のイパリアIpariaやソノチエネアSonocheneaのような小さな共同体は、それぞれが夫と子供たちを伴った母系制の2、3世帯によって構成されている。このような親族関係にある女性たちと、彼女らの家族からなる集落は、しばしばより大きな集落からの援助をうけている。シピボ-コニボ族の総人口は約15,000人と推定される。

シピボ-コニボ族は、考古学的にもその系譜がたどれる特徴のある土器様式をつくっている。そのきわだった特徴は、多くの点で、おそらくともA.D.10世紀頃にはその起源をもつクマンカヤ土器Cumancaya ceramicの伝統に關係づけられる（Lathrap1970a; Raymond, De Boer, and Roe1975）。金属やプラスティック容器の需要の増大やインディオの旅行者用民芸品の増加にもかかわらず、この土器の伝統はそうしたものの影響を受けずに存続している。そして、ほとんどのシピボ-コニボ族の女性たちは土器作りをし、作られたものは、だいたい彼女らの世帯内で用いられる。

シピボ-コニボ土器は、2つの基本的なクラスに分けられる。調理用の器、もっと正確には、火にかけられる器と、非調理用の器である（第3図）。調理用のものには2種類ある。オラollaつまり調理用のポットである（ケンティkënti）（原註1, 訳註2）と、彩色された土器を焼くのに用いられる底のない器（マプ・エイテmapú ëite）である。オラは3つの大きさに分けられ、それぞれ異った機能をもっている。大型のオラ；（ケンティ・アニkënti ani）はほとんど一般にアルコール飲料、特に大量に消費されるマニアック・ビールの醸造に用いられる。中型のオラ；（ケンティ・アニタマkënti anitama）はふつう魚や穀物あるいはマニアックなどから成る日常食の調理に用いる標準的な器である。小型のオラ；（ケンティ・ヴァクkënti vacu）は関節炎やその他の痛み止めの薬物を加熱するのに特に用いられる。

非調理用の器には、壺；（チョモchomo）、ビール杯；（ケンボkënpo）、盛鉢；（ケンチャkëncha）と、シラニア（shrania）と呼ばれる器の4種類がある。壺には3つの大きさのものがある。





第2図 中部および上部ウカヤリ川流域。本論で取扱われる、クマンカヤ文化の考古遺跡と
現代のシピボ-コニボ族集落、土器材料の産地を示している。オペレーションナル・ナ
ビゲーション・チャート (ONC-M25 and ONC-N25) による。

器 形		粘土		混和材		底部			胴部下半			胴 部		
		黒	白	赤	土器粉	カライペ	平底	上げ底	段つき底	なし	図	図	図	図
調理用	オ ラ	上半			X	XX	X					X	X	
		下半	X				X	XX						
非調理用	マブ・エイテ		X			X	XX			X				
	壺		X	X	XX	X	O	O			S.M	M.L	X	O
	シラニア		X	X	XX	X	X				X			X
	ビール杯		X	X	XX	X	O	O	O		X		O	X
盛 鉢			X	X	XX	X	X			X				
											X		X	
											X			X

第3図 シピボ-コニボ土器形態の規範的分類。レイスラップ(1970b)を修正。

大型の壺は、習慣的にビールをつぐための容器であり、しばしば催される祭の期間中、われわれが用いるパンチボウルとほぼ同じような役割をはたす。中型の壺は、基本的に水の運搬や貯蔵に用いられる。そして、小型のものは、河をボートで移動する際、飲物用の水筒として利用される。オラや壺と同様に、ビール杯も3つの大きさのものがある。大型の「共同」の杯は、祭のあいだ人から人へ回し飲みに用いられるものである。中型の杯は、日常ビールを飲むのに使用され、旅をするときに携帯される小型のものは、しばしば逆さにして小型の壺にかぶせられる。非調理用の第3のカテゴリーは、盛鉢である。食事の際、食物はこのボウルに盛られ、この共同のボウルから各人が、それぞれの取り分を指すくいとする。一人前の男や男子の団体の場合は、1つの盛鉢から食物をとるが、婦人や子供たちは、彼らと別かれて座わり、他の1つの盛鉢を用いる。最後の器のカテゴリーは、シラニアであるが、これは今日では稀にしか見

円筒形頸部	頸 部		口縁部		表面処理					大 き さ		
					外 面		内 面					
	樹脂加工	布目	白いうわぐすり	赤いうわぐすり	樹脂加工	コバルト樹脂加工	彩色 / 素地	いぶし焼き		小 型	中 型	大 型
	X			X	X			O				
				X	X							
O	S	X		X X	X B	X						
	X			X X	X B	X						
			X	X	X B	X						
			O O W	O O			O O					
			X W	O O			O O					
			X W	O O			O O					

×、最も一般的な特徴。○、しばしば採用される要素。S、小型の器に適用される要素。

M、中型の器に適用される要素。L、大型の器に適用される要素。W、白いうわぐすりの上に施される要素。B、胴部下半に適用される要素。

られない。大型の壺からビール杯にビールを給仕するのに用いるというのが伝統的な用途である（原註2）。

原材料の調達

その独特な土器の製作にあたって、シピボ-コニボの土器製作者は、ウカヤリ川にそって数百kmにわたって分布する様々な自然の材料を利用する(Lathrap1973; DeBoer1975; Myers1976)。第1表では7つの集落の幾人かの土器製作者たちから聞いた主な原材料の産地をあらわしている。これらのほとんどの位置は、第2図に示されている。土器製作に利用される沖積粘土は、ふつう製作者の村から数km以内のところで局地的に手に入れられる。粘土層の露出地において、粘土は大きな植物片とか石などの混入物を除去され、バレーボールくらいの大きさの塊にまと

められる。粘土はこの形で持ち帰られ貯蔵される。多くの土器製作者は、製作において、それぞれ特有の用途を持つ3種類の粘土を区別している。有機物を多く含む黒色粘土（ウイソ・マプ *huiso mapū*）、白色カオリーン粘土（オソ・マプ *ošo mapū*）、そして赤色粘土（オシン・マプ *oshin mapū*）の3種類である。

3種類の基本的な粘土に加えて、シピボ-コニボの土器製作者は2種類の主要な混和材（第1表にはあらわされていない）を用いる。その一つは、ある種の樹木（*Licania spp.*）の圭酸を含んだ樹皮を黒焦げにし、粉にひいたものである。シピボ-コニボ族はこの樹をムイ *mui*と呼んでいるが、一般にはカライベ *caraipé*として知られているものである（Carneiro 1974）。カライベの木はところどころにしか生えていないが、ふつう土器製作者の集落から、まる1日で往復できる範囲内で手に入れることができる。それらは河筋を遠く離れた内陸部にあることが多い。細長くむかれた樹皮は運搬用のバスケットに入れられ、村に持ち帰られる。未加工の樹皮は、そのままか、あるいは使用できるような形にすぐ加工されるかして貯蔵される。この加工のプロセスは、焼いて黒焦げにすること、その後石製の乳棒で粉にすること、さらに粗い織りの布でふるいにかけること、である。この精製された混和材は使用されるまで、古い壺に貯蔵される。

第2の主要な混和材は、土器片の粉（ケンケシル *Këngkëshr*）である。この粉末の混和材は、現代の土器の破損したものか、もし手にはいる場合は、年代もの、つまり考古学的な土器によって作られる。後者のほうが、軟らかく粉にしやすいという理由で好まれており、さらに考古学的な遺物の堆積の存在は、集落の立地を支配する一つの要素となる。サン・フランシスコ・デ・ヤリナコチヤ、イパリア、シャワヤ、などの現状の集落はすべて、土器片散布地の上に位置している。この混和材は、3段階の工程で作られる。まず土器片は他地域から搬入された敲き石でさらに小さな破片にされる。さらにカピルナ *capiruna* の木（*collicophyllum spruceanum*）で作られたこね鉢状の臼と乳棒ですりつぶされ、さらに目の粗い布でふるいにかけられる。カライベと同様、土器粉の混和材は、しばしば古い壺に貯蔵される。

第3の混和材は、最近使われるに至ったもので、まだそれほど重要ではない。シャナ *shana* という木から作られ、シャナ・ポト *shana poto* と呼ばれるこの混和材は、カライベの重要な代用品と見なされ、基本的には旅行用の器の製作に用いられる。

大量に消費される粘土や混和材は、ふつうせまい範囲内で調達されるのに対して、他の土器の材料は、しばしばかなりの遠隔地から供給される。3種類の天然の顔料が、土器の装飾のために、うわぐすりと塗料として用いられる。白いカオリーンの顔料（マオシ *maösh*）、赤く焼き上がる黄土（マシンティ *mashinti*）、黒いマンガンの顔料（イタワナ *itanhuana*）である。これらの内、白い顔料はもっとも限られた分布を示し、ウカヤリ川下流のカンシャワヤ Canshahuaya 付近と、ウカヤリ川上流で東側の支流、エネパンシェア川 R. Henepanshea に見出されるにすぎない（第2図、原註3）。カンシャワヤのその堆積層は、褐赤色粘土層の中にレンズ状に存在するといわれている（Guizado and Girard 1966: 268）。スパーニ Spani (1966: 101)によれば、

近年このマオシュ*maösh*の堆積層は、ある農場の敷地に含まれたため、シピボやコニボの男たちは、そこでの2日間の労働とひきかえに、この顔料の3個の大きな塊を手に入れるということである。

赤い顔料の分布は、それほど限定されていない。そして2種類のものがある。黃い褐鉄鉱を含むもの（カナ・マシンティ*Kana mashinti*）は、コンタマナContamanaやウトキネア川R. Utoquinea, エネパンシェア川に見出される。赤色のもの（シャワン・マシンティ*shahuän mashinti*）の主な産地は、ピスキ川R. Pisquiの上流である。焼成後、これらはいずれも、シピボ-コニボ土器様式の顯著な赤色を生じる。黒い顔料はだいたいピスキ川からのものであるが、タマヤ川やタワニアTahuaniaとかの産地もある。ウカヤリ川上流の幾人かのコニボ土器製作者たちは、この顔料をウルバンバUrbambaからウカヤリ川を下ってくる船商人から手に入れる。粘土の堆積層として見出される白や赤の顔料とは異り、イタワナは小さな塊の露出として、支流の堤のそばの水中や、湿地に見出される。それは水浸けで、あるいは湿った布で包まれて貯蔵されねばならない。さもないと、この顔料の特性は急速に失なわれてしまうのである。

さらに、まだ他の原材料が土器づくりには必要だ。白く着色された器表を平滑にし、光沢を与えるためのヨモショ*yomošho*と、液体を入れる器の内面の防水に用いるセンパ*sënpa*という2種類の樹脂は、しばしば他地域から搬入されねばならない。ウカヤリ川地方では石材は稀小な物品であり、土器を研磨するための黒い河原石（レンカティ*rëncati*）は貴重品である。このような小石は、あまり見つからない。われわれのシピボ-コニボのインフォーマントたちによれば、アグアティア川R. Aguatiaとタワニア川の河原が、その主な産地だということである。

土器製作に使用される。他地域からの原材料の獲得は、遠距離間の交通と輸送を促進するウカヤリ川主流をシピボ-コニボ族が領有することによって、可能にされている。シピボ族もコニボ族もしたたかな旅人であり、ウカヤリ川では伝統的な丸木舟に乗ったり、あるいは近代的なモーターランチに乗って往来する人々の光景は日常的なものだ。例えば、1971年の8月の間、われわれのいたサン・フランシスコ・デ・ヤリナコチャのシピボ族の首長たちは、ウトキネア川のような近隣の地域からも、またさらに遠方のピスキ川、タマヤ川、シャワヤ川の地域に住む友人や親戚たちの訪問をしばしばうけた。サン・フランシスコ・デ・ヤリナコチャの土器製作者たちは、樹脂を手に入れるという目的もあって、タマヤ川ぞいのイマリアコチャImariacochaの親戚をよく訪れた。このようなうちわの訪問のネットワークは、それ自体、土器製作に利用される多くの原材料の流通に役立っている。ついでながら、男たちは、11月から4月の雨期に木材の伐採作業のため、かなり遠方まで出かせぎに行くが、この季節労働の際に、しばしば他地域に土器が供給される。

シピボ-コニボ族は、ウカヤリ川の主流域を占拠しているために、広域に散在する材料を統合して精巧な土器をつくる。あるいはこうした理解は一面的にすぎるのかもしれない。しかしながら、この広領域の占拠こそこうした土器つくりを可能にするものであって、ウカヤリ川とその支流に沿った氾濫原が良好な耕地と漁場に加えて、多様な資源をもたらす事実は強調されね

第1表 シピボーコニボ土器製作者が用いる土器材料の产地

居住地	粘 土			顔 料			樹 脂		磨 き 石	すべての材料 への距離合計
	白	赤	黒	白	赤	黒	ヨモショ	センバ		
サン・フランシスコ 製作者1	カシボカーニョ (1)	カシボカーニョ (1)	ヤリナコチャ (1)	エネバンシェア (280)	ウトキネア (10)	ヒスキ中流 (280)	イマリアコチャ (125)	イマリアコチャ (125)	アグアティア (65)	888
サン・フランシスコ 製作者2-3	カシボカーニョ (1)	カシボカーニョ (1)	ヤリナコチャ (1)	カンシャワヤ (240)	ウトキネア (10)	タマヤ (100)	イマリアコチャ (125)	イマリアコチャ (125)	アグアティア (65)	668
サン・フランシスコ 製作者4-5	カシボカーニョ (1)	カシボカーニョ (1)	ヤリナコチャ (1)	カンシャワヤ (240)	ウトキネア (10)	タマヤ (100)	イマリアコチャ (125)	イマリアコチャ (125)	アグアティア (65)	668
サン・フランシスコ 製作者6	カシボカーニョ (1)	カシボカーニョ (1)	ヤリナコチャ (1)	カンシャワヤ (240)	コンタマナ (180)	タマヤ (100)	イマリアコチャ (125)	イマリアコチャ (125)	?	773+
サン・フランシスコ 製作者8	カシボカーニョ (1)	カシボカーニョ (1)	ヤリナコチャ (1)	エネバンシェア (280)	?	ヒスキ中流 (280)	イマリアコチャ (125)	イマリアコチャ (125)	アグアティア (65)	878+
サン・フランシスコ 製作者10	カシボカーニョ (1)	カシボカーニョ (1)	タマヤ (100)	エネバンシェア (280)	エネバンシェア (280)	ヒスキ中流 (280)	?	?	タワニア (360)	1302+
サン・フランシスコ 製作者11	?	?	?	カンシャワヤ (240)	ヒスキ中流 (280)	ヒスキ中流 (280)	?	?	?	—
サン・フランシスコ 製作者12	?	カシボカーニョ (1)	ヤリナコチャ (1)	カンシャワヤ (240)	ウトキネア (10)	?	?	?	?	—
サン・フランシスコ 製作者13	?	?	ハカチャ (180)	カンシャワヤ (240)	?	?	?	?	?	—
サン・フランシスコ 製作者14	?	?	ハカチャ (180)	カンシャワヤ (240)	コンタマナ (180)	ヒスキ中流 (280)	イマリアコチャ (125)	?	?	—
サン・フランシスコ 製作者15	カシボカーニョ (1)	カシボカーニョ (1)	ヤリナコチャ (1)	?	?	?	イマリアコチャ (125)	?	?	—

イハリア 製作者16	シャララ (10)	アティチャ 使用せず	バカチャ (30)	エネハンシェア (70)	エネハンシェア (70)	ウルバンバ (260+)	イハリア中流 (10)	イハリア中流 (10)	タワニア (150)	610+
ソノチエネア 製作者17	アティチャ (5)	アルヤ (5)	アルヤ 使用せず	エネハンシェア (85)	エネハンシェア (85)	タワニア (5)	アティチャ (5)	アティチャ (5)	タワニア (5)	200
シャワヤ 製作物18	クマリア (25)	カリヤリア (5)	カリヤリア (5)	エネハンシェア (15)	エネハンシェア (15)	ウルバンバ (175+)	アルヤ (5)	アルヤ (5)	タワニア (65)	315+
ハネイリョ 製作者19	カリヤリア (5)	カリヤリア (5)	カリヤリア (5)	カンシャワヤ (200)	コンタマナ (140)	タマヤ (140)	イマリアコチャ (165)	イマリアコチャ (165)	タワニア (400)	1225+
ハネイリョ 製作者20	カリヤリア (5)	カシボカーニョ (5)	カリヤリア (5)	カンシャワヤ (200)	コンタマナ (140)	ヒスキ中流 (240)	イマリアコチャ (165)	イマリアコチャ (165)	アグアティア (25)	950
ハネイリョ 製作者21	カシボカーニョ (40)	カリヤリア (40)	カリヤリア (5)	カンシャワヤ (200)	ヒスキ中流 (240)	ヒスキ中流 (240)	イマリアコチャ (165)	イマリアコチャ (165)	クシャバタイ (170)	1265+
ハネイリョ 製作者22	使用せず	使用せず	カンシャワカ (5)	カンシャワヤ (200)	ヒスキ中流 (240)	ヒスキ中流 (240)	クシャバタイ (170)	?	クシャバタイ (170)	1025+
ハネイリョ 製作者23	カシボカーニョ (40)	カシボカーニョ (40)	カリヤリア (5)	カンシャワヤ (200)	ヒスキ中流 (240)	ヒスキ中流 (240)	?	?	アグアティア (25)	790+
チャラシマナ a	付近で手にはいる 一種類の粘土(1)			カンシャワヤ? (180)	ヒスキ中流 (100)	ヒスキ中流 (100)	?	ヒスキ中流 (100)	?	—
ハウコチャ (Spani 1966)	?	?	?	カンシャワヤ (145)	コンタマナ (85)	ヒスキ中流 (165)	?	?	?	—
材料までの 平均距離(km)	10	8	31	201	129	195+	111	103	125	826+

注：括弧内の数字は、産地と製作者間をつなぐ河川の道のり。

a ロベルタ・カンポス Roberta Campos から得た情報。

ばならない。

製作

シピボ-コニボ土器製作の詳細な研究は、さらに専門的な取扱いを必要とするだろうが、ここでは、ただ幾つかの観察を提示するにとどめよう。土器製作は、製作者の家か、その目的のために作られた特別な小屋の中で行なわれるようだ。土器製作は一年じゅう行なわれるが、5月から10月の乾期が特に好まれる。2つの主要な要因がこの季節性を説明する。つまり、雨期の間は粘土層が浸水してしまうということと、土器の乾燥に適した晴れた日が、ほんの僅かしかないということである。

粘土の混和材の体積に対する比率は2倍から3倍の間だが、相異なる粘土や混和材の混合法は作られるべき器種によって決まる。壺、ビール杯、シラニアといった非調理用の器は、理念的には、等量の白色粘土と赤色粘土に、カライペ1に対して、土器粉2の割合の混和材を用いたものから作られる。調理用の器は、さらに複雑な処法による。オラでは、カライペ2、土器粉1の割合の混和材と黒色粘土で胴部下半と胴部上半が作られ、これに対して、頸部は先の混和材を逆の割合で混合した赤色粘土で作るというのが理念的なやり方である。これらの理念的な規則ないし粘土と混和材の組み合わせの処方は、必ずしも実行されるわけではないし、時としては実際の土器製作行動の準拠規範にもなっていない。

例えば、ピスキ川ぞいのチャラシュマナCharashmanáの土器製作者たちは、ただ1種類の粘土しか用いないのに対し、ソノチエネアとイパリアでは、2種類の粘土が用いられる（第1表第4図）。サン・フランシスコ・デ・ヤリナコチャでは、粘土と混和材の組み合わせは、製作者やその必要に応じて様々である。非調理用の器の粘土の組み合わせは、特に変化に富んでいる。第4図に示されているように、24例のうち、ただ6例のみが赤と白の粘土を等量にする慣習上の理念にしたがっているにすぎない。8例がこの処法を単純化し、赤か白のどちらかの粘土だけから土器を作っている。そして、3例は赤と白の粘土に黒い粘土が加えられている。この単純化や代替化は、規定された材料の入手が、製作時点で困難であり、しかも「ルール」を無効にしないことを意味するのであろうが、しかしこうした推論をただ土器から引き出すのは、ほとんど不可能だといえよう。考古学的な見込みからいえば、これらの容器の粘土の組み合わせは、赤、白、黒の重層的なセットとして、よりよく考慮されうるだろう。しかし、調理用の器における粘土と混和材の組み合わせのルールは、それ自体とはより両立したかたちで、実際の行動に変換されているのだ。

土器の組み立ては、粘土紐の巻き上げによる。粘土紐の接合、巻き上がった器の成形の後檣円形のスクレイパー（*shapa*）で器表を滑かに仕上げられる。このスクレイパーは、巾広の鎌で、ひょうたんの皮から切りとられ、さらにパイチエ*paiche*という魚（*Arapaima gigas*）のやすりのような骨片で角が調整されたものである（原註4）。土器の組み立て過程は、もちろん、特定の器の組み立てを遂行する、合目的的な行動である。この過程に対する土器製作者の見と

おしは、第3図で表として要約されているような、選択技の連続的な系列の一つである。その選択技とは、底部形態（ポインケ *poinke*）、胴部下半形態（チポン *chipón*）、体部形態（ポロ *poro*）、頸部形態（テシロ *tëshro*）、と口縁部形態（ケシャ *kësha*-直口、ケシパ *këshpa*-外反）である。

表面の仕上げと装飾は器形によって変異する。調理用の器の装飾は、沈線文（シェパマン・アカ *shëpamän aca*）とか、刺突文（チャチャ *chacha*）、指圧痕（メクエマン・メイア *mëquëmän mëia*）といったような、表面の小細工に限定される。内面は焼成後、いぶされるようだ（原註5）。非調理用の器は彩色される。壺とシラニアの頸部と胴部の接合部は、ふつう黒と赤で白のうわぐすりの上に彩色される。内面は焼成後、センパの樹脂でコーティングされる。ビール杯も同様にコーティングされる。盛鉢の外面は、赤のうわぐすりの上を白で彩色され、内面はいぶされるか、あるいは素地に直接彩色されるようだ。円面をいぶされた盛鉢は、シチューやスープ、その他の「汁気の」食物を盛るのに対して、素地のままのものや、彩色されたものは、焼き魚とかプランティンなどの「乾いた」食物に用いられる。時折、盛鉢は、白いうわぐすりをかけられ、ビール杯のような形にされることがある（これは特にケンポ・ケンチャあるいは
ビア・マグ・フード・ボウル
ビール杯-盛鉢と呼ぶ）。この場合でも、ビール杯にはみとめられない樹脂加工をせず、黒くいぶしたり、彩色したり、彩色するといった弁別的な特徴は意識的に残されている（原註6）。

土器は幾つかの異なる方法で焼かれる。盛鉢、ビール杯、シラニアと小型の壺は、マプ・エイテの中で一つずつ焼かれる。未焼成の土器は底のないマプ・エイテの内側に逆さにされて、木の灰（チマプ *chimapú*）でおおわれる。今日一般的には、マプ・エアテはメタルグリルで保持され、その下で火がたかれる。小型と中型のオラは、ふつう平行な2本の丸太でできた特別の小囲いの中に置かれ、それぞれの土器の上にピラミッド状に組まれた樹皮（オトウクリ *otukuru*）や棒の燃料（トワ *tohua*）で焼かれる。大型のオラとジャーは、常に1つずつ焼かれる。古いポットや罐、ブリキの三脚の上で逆さに支えられた器は、小さく浅いピットの中で起こされた低い炎で、しだいに加熱される。この予備的な焼成の後、時に好まれた樹皮とか棒材の燃料を焼成物の上におおって、最終的に焼成される。樹脂は焼成後ただちに施される。樹脂が溶けるほど、充分熱いうちに、海牛やバクあるいは牛の助骨の把手の端に取り付けられたヨモショやセンパの塊で、所定の表面にコーティングされる。

マプ・エイテは時々、ふつうの調理用の炉の上で使用されるが、他の土器は一般的に土器製作者の家や土器作りの小屋のそばで起こされた特定の火で焼かれる。シピボ-コニボ族の一つの世帯の近傍には、幾つかの灰のあつまりが見出される。それらは、一回の焼成か、もしくは一連の焼成を示すものである。

製作に要する時間は、製作者と器形によって様々である。第2表は、1人の製作者が5種類の土器を作るのに要した時間を示している。その過程は、始めから終わりまで観察されたが、乾燥に費した時間は含まれていない。予想どおり、より表面積の大きなものは、巻き上げ、スクレイピング、研磨、彩色ともにより時間が費やされている。また、第2表は、幾つかの土器が、一定期間中で並行して製作されるという事実も示している。

製作者1		製作者2-3		製作者4-5		製作者6	
粘土	混和材	粘土	混和材	粘土	混和材	粘土	混和材
オラ (胴部上半)							
オラ (胴部下半)							
壺							
ビール杯							
盛鉢							
シラニア							

白色粘土 赤色粘土 黒色粘土

第4図 シピボ-コニボ土器製作者が用いる粘土と混和材の組み合わせ例。

製作者7		製作者8		製作者9		製作者15		製作者16	
粘土	混和材	粘土	混和材	粘土	混和材	粘土	混和材	粘土	混和材



土器粉



カライベ



シヤナ・ポト

100%
50

第2表 何種類かの土器の製作時間

器 形	開 始		完 成		所 要 時 間		
	日	時 刻	日	時 刻	日	時	分
A. シラニア	%3	9:02A.M.	%16	4:16P.M.	7	7	14
B. 盛 鉢	%8	3:50P.M.	%13	4:50P.M.	5	1	0
C. 中型オラ	%9	2:06P.M.	%13	12:24P.M.	3	22	18
D. 小型オラ	%9	2:06P.M.	%13	12:24P.M.	3	22	18
E. 大型壺	%6	2:45P.M.	%13	3:20P.M.	7	0	35

	A	B	C	D	E
粘土をこねる	(14)	—	—	—	—
粘土紐を作る	18	4	9	5	50
巻きあげ	10	3	14	7	25
スクレイピング	159	45	82	56	230
うわぐすりをかける	8	5	0	0	16
研磨	24	20	14	12	50
装飾	110	45	16	7	260
予備焼成	189	120	73	73	224
焼成	69	35	35	35	30
樹脂加工	5	0	0	0	10
合計(分)	592 a	277	243	185	895

a. 粘土をこねる時間は含まれていない。

土器製作は、基本的には個人の作業であるが、一世帯の2人あるいはそれ以上の女性が、そのプロセスのある部分で協力しあうことが時々あるようだ。彼女たちは、研磨や装飾もまた交代でおこない、大型のオラや壺の焼成に際しても一緒に作業するらしい。

使 用

ほとんどの土器は、それを製作した世帯で使用される。注意すべき例外は、売るために作られた土器である。1971年の18世帯における土器の集計調査では、合計320個のうち34個がこのカテゴリーにはいった（第3表）。この土器はおもに旅行者たちに売られる（原註7）。小型と中型の壺も、非インディオ世帯のある地域でも需要があり、水の運搬用として使われる。第3図のシピボ-コニボ自身によって使用されている286個の土器のうち、3個のみが共同体の外部から持ち込まれたものであった。それに対し、9個は共同体内部の異った世帯で作られたものであった。後者のうち3個は、祭のとき、臨時に余分なビールの容器を必要とする世帯に貸しつけられた、大型の壺であった。また4個はいわゆるパスクア・ケンチャ *Pasqua k'encha* であり、イースターの祭のために作られた盛鉢の特殊な形態であった。このパスクア・ケンチャは、首長の家の女性たちによって作られ、祭の間、食物やビールの準備を手伝ってくれた、他の世帯の女性たちに与えられるものである。

使用しない土器はふだん、屋根の垂木から吊るされた棚か、屋外の特別な棚の上に保管され

る。大型のジャーやオラのような重い器は、ふつう台所（構造的には住居と分離している）の固くしまった土間に立てられているか、あるいは住居の高床の下に保管されているようである。

第3表にまとめられた住民調査のデータでは、世帯の規模や構成と、土器の数量とは、何の相関性もみとめられない。この相関性を不明確にしている第1の要因として、アルミニウムのポットやホウロウびきのボウルなどによって、焼き物の器が徐々に減少しているということがあげられる。金属製の容器は、現在ほとんどの世帯にあるが、われわれは、それがどのくらいの割合を占むかを示す情報を得ていない。第2の要因として、各世帯の実際上の必要によつて、その数量が直接的にコントロールされているのではないということである。例えば、イパリアのコニボ集落では、すべての器の半数を優に超える数量の器が破損した土器のスペアとして、あるいは急な来客のもてなしにすぐ利用できるように屋根裏に保存してあった。伝統的なエチケットからいえば、各世帯は1個か、それ以上の新品のビール杯の持ち合わせがなければならない。訪問者が、その家に到着すると、まず彼はこれらの器のうちの一つでビールをサーヴィスされる。もしも、そのビール杯が新しく作られたものに見えないとしたら、それは客に対する侮辱であり、主婦の恥とされる。もう一つの要因は、個人的な状況によるものだ。一般的に熟練した土器製作者は、より劣る者よりも多くの土器を作る。まだ離乳期をむかえていない幼児をもつ婦人の土器製作者は、だいたい子供から解放された者たち、大きくなつて手のかからなくなつた子供をもつ者より劣っている。このようにして家庭内の土器の数は、世帯内の構成員の数よりもむしろ、他の変数の反映である（原註8）。

既に述べたが、それぞれのシピボ-コニボ土器の諸形態は、盛鉢とかビール杯といった、われわれの呼び名で、事実上明白なように、様々な機能に対応している。多くの場合、これらの名称は実際上の用途法を意味しているが、それは、しばしば起る補助的で二次的ないかなる使用も含意されていないことになる。第1図は、器の用途が、延長されたり、変更されたりする主な過程を図示したものである。土器の維持maintenanceは、行動の同一方向で、持続的な使用を可能にする修理やその他の修正を意味する。派生的利用Lateral cyclingとは行動の新たな方向で、土器を再利用することを意味する。そして、再利用recyclingとは、土器片が新しい土器の製作のための成分になるという意味では、派生的利用の特殊な事項ということである。

破損した土器の修理には、主な2つの技法がある。両者は共に土器の口縁部にはいったクラックの修理のためのものである。第1は、クラックのはいった両側の器壁に穿孔し、撻糸、もし手にはいるならば針金をその孔に通し、破損部を固定するために縛りつける方法である。他の一つは、土器を水ですすぎ洗い、一オラは砂で研磨されるようだが—その後、樹脂の接着剤でクラックを埋める方法である。

第4表は315個の容器の一定観察期間における様々な使用をまとめたものである（原註9）。どんな容器でも一般的な貯蔵に供されるであろう。中型の壺には、近くの河か湖、あるいはきわめて稀な場合降雨で得た水を貯蔵するのが一般的なようだ。これは予想されることであった。大型の壺には、しばしばビールが入れられる。しかし、他の用途のほとんどは、それ自身の基

第3表 シピボ-コニボ世帯の土器集計調査例

	家 族 数				オ ラ			大型
	合 計	大 人	子 供	土器製作者	大 型	中 型	小 型	
サン・フランシスコ 家屋1	6	2	4	1	— 1 —			— —
サン・フランシスコ 家屋3	7	5	2	1	1 1 —	1 — —		2 — —
サン・フランシスコ 家屋7	6	3	3	1	3 1 —	2 2 —	1 — —	1 — —
サン・フランシスコ 家屋8	4	2	2	1		2 — —		1 — —
サン・フランシスコ 家屋9	6	2	4	1		2 — —		1 — —
サン・フランシスコ 家屋10-11	7	4	3	2	4 2 —	3 1 —	1 1 —	2 2 —
サン・フランシスコ 家屋12	3	2	1	1	2 — —	1 — —		— 1 —
サン・フランシスコ 家屋13	6	4	2	2	1 — —	4 — —	1 — —	
サン・フランシスコ 家屋14	8	3	5	2	2 — —	— 1 —	1 — —	2 — —
サン・フランシスコ 家屋15	9	4	5	1			1 — —	2 — —
ボカ タマヤ	6	2	4	1	2 — —	3 — —	1 — —	1 — —
フエルト フニオ	6	3	3	2	2 — —		1 — —	
イハリア 家屋1	3	2	1	1	1 1 —	6 — —	3 — —	1 3 —
イハリア 家屋2	5	5	0	2	1 — —	1 — —	1 — —	1 — —
イハリア 家屋3	6	3	3	1	— 1 —	— 2 —		— 1 —
ソノチエネア 家屋1	2	2	0	1	1 — —	4 1 —	2 — —	1 — —
ソノチエネア 家屋2	6	2	4	1	1 — —	2 2 —	2 — —	
合 計	96	50	46	22	21 7 —	31 9 —	15 1 —	15 7 —

注：上一完形品、左下一破損品、右下一商品を各こまで示している。

壺			ビール杯		盛 鉢		そ の 他		合 計
中 型	小 型	ミニチュア	大 型	中型・小型	中 型	ミニチュア	マフ・エイテ	シラニア	
1	1			1	2				5
1 -	- -			- -	1 -				3 -
1	1			1	2				9
- -	- -			- -	- -				1 -
1	1		1	2	4				16
- -	- -		- -	1 -	- -				4 -
4		1		1	6				15
- -		- -		1 -	2 2				3 2
2					4	1			10
- -					- -	- -			- -
2	1			2	3	2	2	1	23
2 2	- -			1 -	1 7	- -	- -	- -	10 9
2			1	2	4				12
- -			- -	- 1	- -				1 1
5	2		1	2	4	-	3		23
1 -	- -		- -	- 1	- -	1 -	- -		2 -
3	1			2	6				17
- 3	- -			- -	- 12				1 15
-				3	2		1		9
1 -				1 1	- -		- -		2 1
1									8
- -									- -
2	2						1		8
- -	- -						- -		- -
2		1			3	1	-		18
4 -		- -			- -	- -	1 -		9 -
5	2			2	5				18
1 -	- 6			- -	1 -				2 6
	2			1	7	1			11
	1 -			- -	- -	- -			5 -
4					3		1		16
- -					1 -		- -		2 -
1	1			3	7	1	1		19
1 -	- -			- -	1 -	- -	- -		4 -
36	14	2	3	22	62	6	9	1	237
11 5	1 6	- -	- -	4 2	7 21	1 -	1 -	- -	49 34

第4表

レビホーコニホト器の使用例

			容器としでの利用														種々の利用					合計		
			食 料			土 器 材 料					そ の 他					空のもの			器台	ニワト リの止 り木	コマ ル	マフ・ エイテ	混和材 の補助	
			固形 食物	ビール	水	粘土	混和材	顔料	樹脂	装飾品	綿花	薬品	染料	布	アヒル の水槽	カメの 水槽	貝	予備	商品					
オ ラ	大型	完形	1			2					1			1		1		14						20
		破損				1	1								1						2	1	4	10
	中型	完形	4	1		3					2			2	1			18			2			33
		破損																		1		2	5	8
	小型	完形	1			3					5	1	1					5						16
		破損									1									1				2
壺	大型	完形	2	6		1												10						19
		破損	1		9											1								6
	中型	完形	1			2					3			1			1		18	3	1			39
		破損				1					1													9
	小型	完形	3							1								10	6					20
		破損																		1				2
ビ ー ル 杯	全ての サイズ	完形		1		1		1		2						1		22	2					28
		破損								4								2						4
盛 鉢	全ての サイズ	完形	3			1					2					1		56	21					88
		破損															10							11

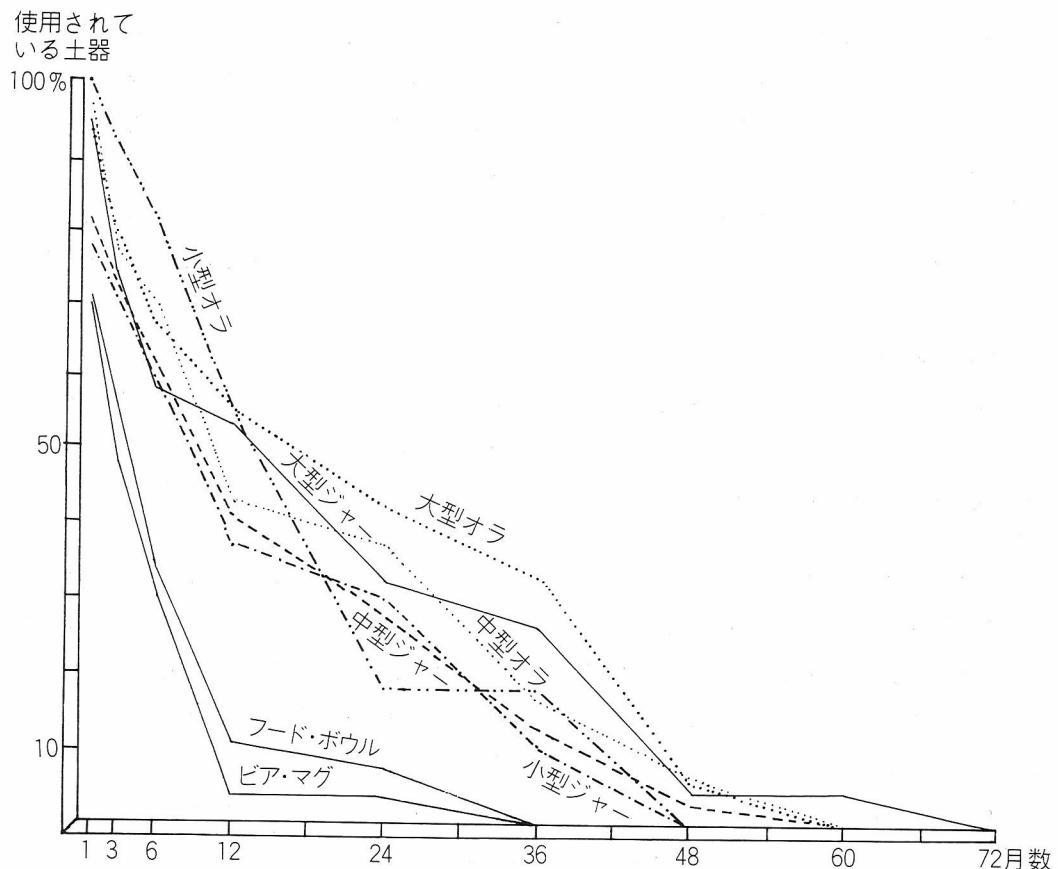
本的な、あるいはもともと定まった機能とは単純に対応していない。派生的利用の他の例として、ポットの器台としてのオラや壺の利用、コマレ *comale* (原註10)としての大型オラの破片の使用、にわとりのとまり木への大型や中型オラの転用、そして底部が破損した中型のオラをマプ・エイテに改造すること、などがある。

すでに述べたように、過去あるいは現代の土器片は、しばしば粉にされて土器の混和材として再利用される。現在、この再利用のために、壺やオラという2つの器形が選ばれる(第4表)。

廃棄と廃棄物

土器作りにみられる原材料の調達および製作行動は、土器の具体化として、かなりの時間と労力を費やすものである。さらに、土器は、ふつう使用、あるいは修理してもどうにもならない程損傷を受けるまで「応急処置」されることによって、維持されている(原註11)。第5図は、主要なシピボ-コニボ土器の器形ごとに、その使用期間をグラフにしたものである。第5表は、これらのデータを、それぞれの器形について、平均寿命、使用頻度、および考古学的資料に反映された頻度に変換したものである。寿命についてのデータは興味深い様相を呈している。盛鉢とビール杯は、急激な下降を示している。この事実は、これらの器形の使用頻度や移動性の大きさ、器壁が薄く必然的に脆弱な作りになっているということを反映している。大型の壺やオラは、それ程頻繁に用いられないこと、移動が少ないと、厚い器壁をもっていることなどの相補的な結果として、その寿命は長い。めったにしか使うことのない、小型のオラやマプ・エイテのような器形は、かなり長い寿命をもっている。器の破損と廃棄における、これら様々な要因の重要度の比較評価に関しては、さらに多くの容器の詳細な生活史情報の検討をえる必要があろう(原註12)。

ほとんどの土器は、世帯内で、製作、使用、破損、廃棄される。この世帯とは、小まめに除草された小ぎれいな広場と、家屋と台所という少なくとも2つの構造物を含んでいる。広場は、毎日の習慣として、ヤシの葉で作られた箒で掃かれ、ふつうの庭用鋤のような木器で整理されることによって、清潔にされている。台所からの廃棄物、こわれた土器、その他日々の行動によって生じた廃棄物は遠心的に世帯領域から遠ざけられ、その周囲に堆積する。孤立した世帯では、この作用は時がたつにつれて、ドーナツ型の堆積の盛り上りを作る。また、幾つかの世帯が1つの広場を共有している場合、それは広場全体をめぐる扇形のものとなる。様々な地形によって、このパターンは変化する。例えば、サン・フランシスコ・デ・ヤリナコチャの廃棄物の多くは、舌状台地の両側に掃き落とされているようであり、その斜面を貫流している峡谷も、ごみ捨て場として利用されている(原註13)。世帯内で、落したり、他の事情で破損した結果生じた器の破片は、数日以内に二次的な廃棄場所 *site of secondary refuse* (訳註2)へ掃いたり、かき集められたりする。しかし、ある場合には天候がこの仕方を変化させる。豪雨の最中あるいはその後、小さな破片は、その上を踏まれると、しっかりと広場の地面に埋め込まれる。



第5図 主なシピボーコニボ土器の器形別寿命曲線。この曲線は1960年代にわれわれの一人がおこなった2000個近い土器の集計調査の結果と一致している。先の調査では大型壺とオラは10年以上も健在であった。

これらの破片は時がたつと、毎日広場の表面を掃き下げる所以で、あたかも今日みとめられる考古学的な土器片のように、顕著に地面から突き出しているのがふつうである。

シピボーコニボ族は、廃棄物に関して、予想可能な一般的パターンの明確な事例を提供している。つまり、定住している共同体においては、使用と廃棄の場所が一致する初期的な廃棄物 primary refuse(訳註2) はたぶん一時的なものであり、いっぽう行動のもっとも少ない場所であるゴミ捨て場では廃棄物が顕著に増大するということである(Schiffer 1972:162)。例えば、盛況な土器インダストリーがあるイパリアでは、家屋のすぐ近くに設けられた試堀ピットからは、3つの現代の土器片しか見い出せなかった。それに対して、サン・フランシスコ・デ・ヤリナコチャの二次的な廃棄物は、約50年以上にわたって7.5~15cmの間の様々な深さに堆積した土器片によってなりたっている(Lathrap 1962:144-145)。世帯領域外の諸行動は、基礎的な廃棄の一時的例外や考古学的には観察不可能な事態の原因となる。例えば、水運搬用のジャーの偶発的な破損による土器片は、常に付近の川や湖とすべての世帯をつないでいる小路にそつ

第5表 シピボ-コニボ土器の平均寿命、使用頻度(N_o)、考古学的な堆積(ゴミ捨て場)に反映する頻度。

器 形	N_o	Percent	平均寿命 (年)	N_{100}	Percent	$K =$ $\frac{Percent\ N_o}{Percent\ N_{100}}$
大型オラ	33	12.5	1.38	1,196	4.6	2.72
中型オラ	30	11.4	0.88	1,704	6.6	1.73
小型オラ	11	4.1	1.13	487	1.9	2.16
大型壺	19	7.2	1.13	841	3.2	2.25
中型壺	39	14.8	0.78	2,500	9.8	1.51
小型壺	27	10.3	0.71	1,901	7.4	1.39
ビール杯	23	8.7	0.24	4,792	18.7	0.47
盛鉢	73	27.8	0.31	11,774	46.1	0.60
マプ・エイテ	6	2.2	1.00	300	1.1	2.00
シラニア	1	0.3	—	—	—	—
合 計	262	99.3		25,495	99.4	

出典：ド・ボーア(1974)によって報告された土器サンプルを総合し、展開した。

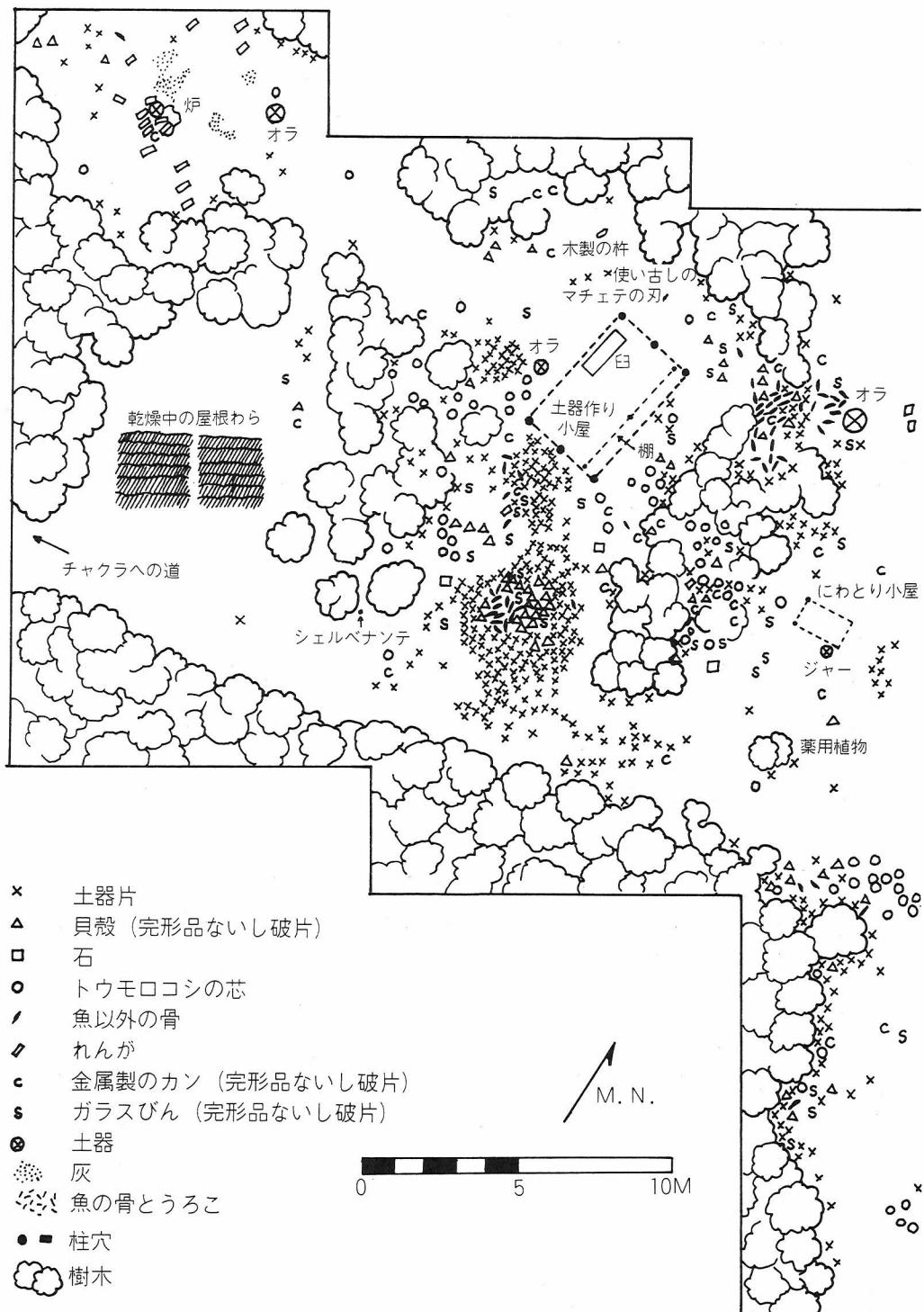
注： N_{100} は、主なシピボ-コニボ土器の100年間の堆積を示している。

て散らばっている。

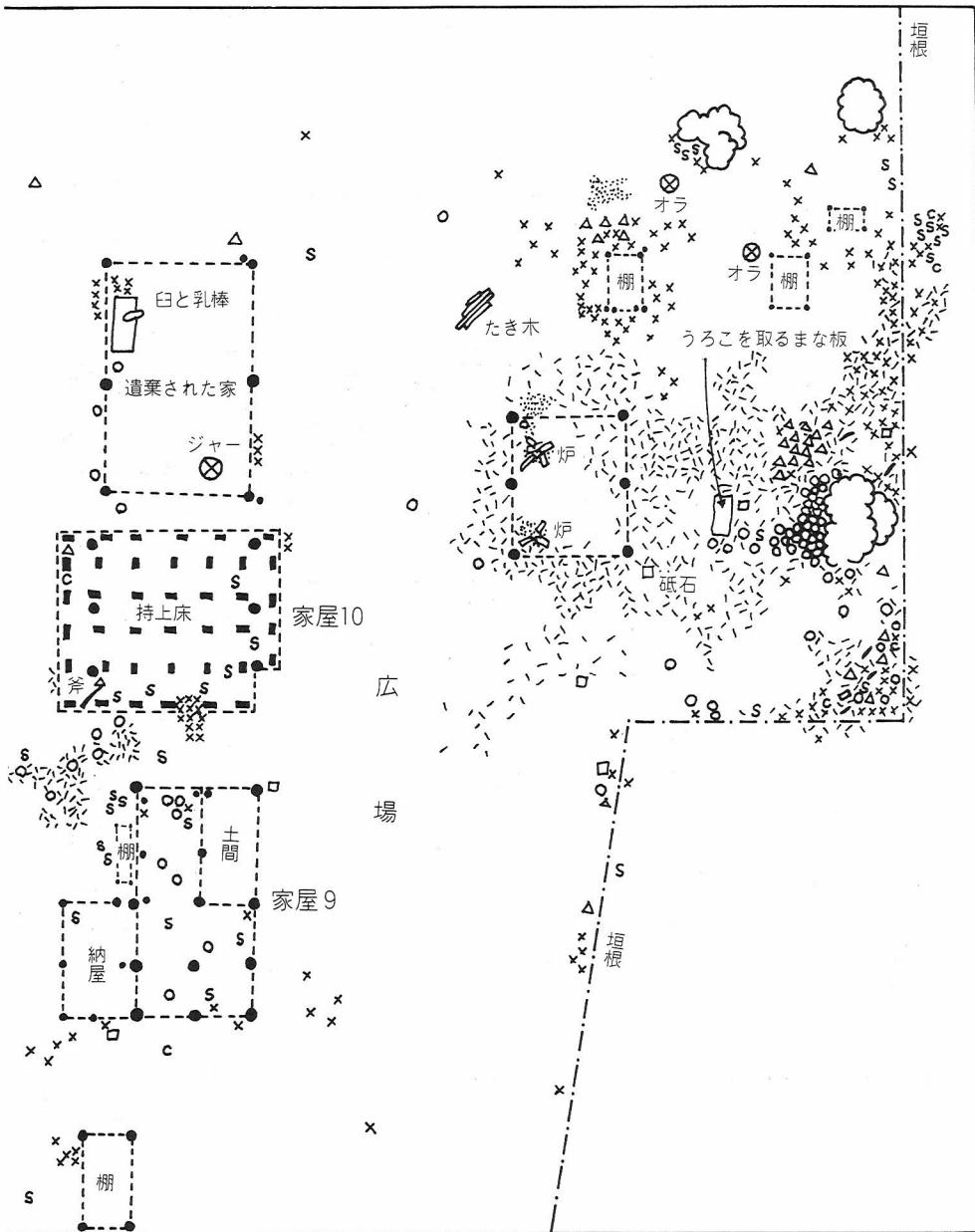
さらに廃棄のパターンを検討するのに、より詳細な特殊事例を考慮することは有りであろう。第6図は、サン・フランシスコ・デ・ヤリナコチャの家屋9と10同辺の、土器を含めた何種類かの廃棄物の表面分布を表わしている。第7図では、同じ地区の土器片の密度を図式的に示している。これらの廃棄物の散らばり方は、必ずしも典型的ではないが、すべてのシピボ-コニボ居住地に適用される廃棄物が堆積する或る種のプロセスを示している。事実上、家屋の敷地と広場には、廃棄物がないということに注意していただきたい。そこみとめられる廃棄物（例えば、O17区に集中している魚の骨）は、この分布図が作られる直前に生じ、まだ掃かれていなかったと推察される。予想された如く、二次的な廃棄物は、広場の西の境界である樹木の間と、東の境界である垣根に堆積している。これらの場所では、成長した雑草やマニアックの削りくずやバナナの皮が、土器片のような小さなものを見つけにくくようにしているので、土器片の数量は小さな頻度を示している。

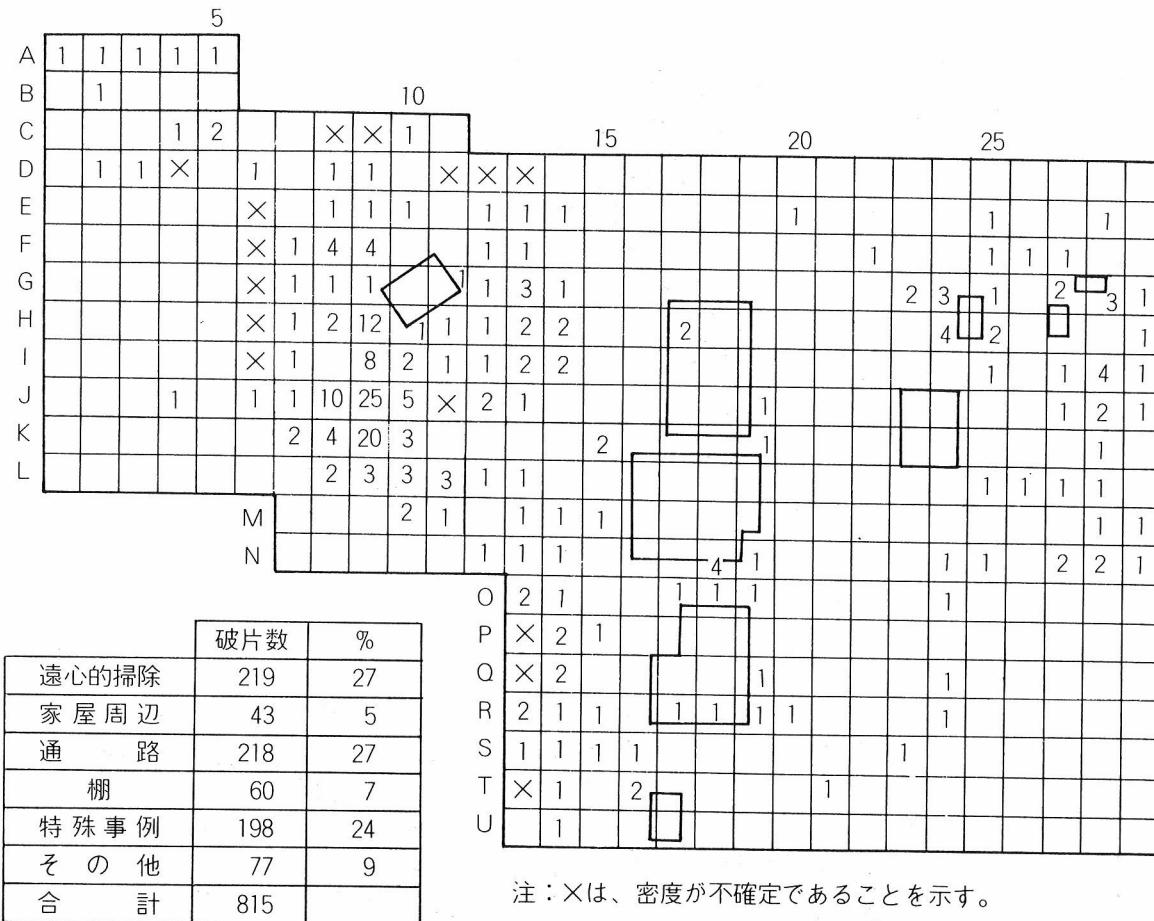
第6、7図では他の分布現象も明らかにされている。よくある事故は、屋外の保管用の棚から土器が落ちることで、そこでは、土器片が定期的に生じ、つまり「事故多発地帯」になりがちである（U17区、G24区、G27区）。軒先からの降雨は、土器片が堆積しそうな浅い溝を作る（H17区、J19区、N18区）。人々から土器作り小屋につながっている小路に沿って見い出される土器片は、遠心的な掃除によって生じる、二次的な廃棄物としての土器片より、細かくなる傾向にある（第8図）。このことは、人々が小路に沿って歩くことによって、土器片を細かく碎くということに原因する。（原註14）J19区における土器片の密集状態は、最近の大型壺の偶発的な破損によるもので、第7図の「特殊事例」に属する。

第6図にみられる、もう一つの特徴は注釈に値する。暴風雨のときに、いくつかの屋根の支



第6図 サン・フランシスコ・デ・ヤリナコチャ家屋9、10周辺の各種の廃棄物とその表面分布。



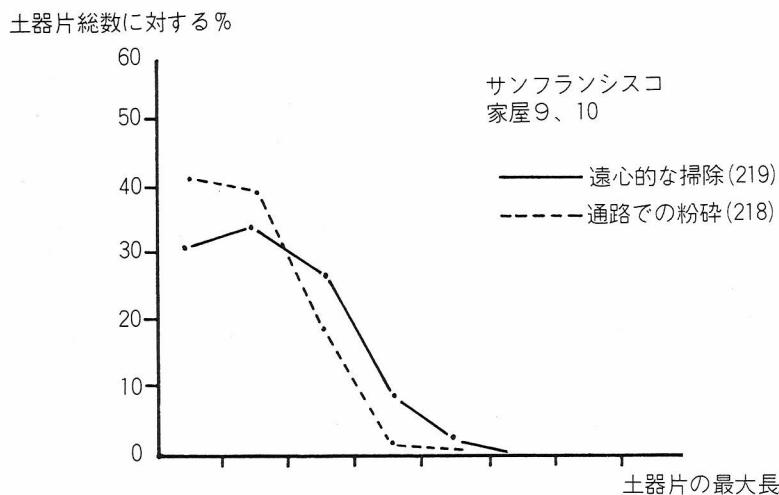


第7図 サン・フランシスコ・デ・ヤリナコチャ家屋9、10周辺の土器片の密度。

柱が折れたので、北の端の家屋は遺棄された。その居住者たちは、すぐ南側に家屋10を建てた。この場合、全ての家具や家庭用品を新しい家に移動させるのに支障はなかったのは言うまでもない。当然、古い建物は荒廃しているが、家屋10の人々によって、仕事場として用い続けられた。しかし、非常に遠く離れたところに、前の家を遺棄し、新しい住居を定めた場合には、非常に多くの見棄てられる物資の量を想定することができる（原註15）。

まとめ

ウォルター・テイラー Walter Taylor (1948; 145) が30年前に強調したように、すべての考古学的推論は、結局次の3種類のデータに依存している。(1)頻度frequency、(2)形態的な特性 formal properties、(3)行動の副産物の空間的な分布 spatial distribution of behavioral by-productsである。われわれは、シピボ-コニボ族の土器インダストリーから、これらのデータを得ようと試みた。われわれの検討は、広範囲に散在している原材料の調達、それらを完成された形態に結合する土器製作、基礎的および二次的なコンテクストにおける土器の使用、そして考古学的資料の終局的編成として作用する廃棄物形成行動に焦点があてられた。廃棄物の形成という最後の場面は、一般的な人類学の文献の中に、伝統的な土器製作技術の、考古学的に有益で優れた研究があるにもかかわらず、これまで軽視されつづけてきた（例えば、Guthe 1925; Bunzel 1929; Fontana et al 1962）。この軽視がおそらく、考古学的資料は、それを生み出した「トータルな文化システムの化石化した構造」を表象するのだという、場当たり的で楽天的な主張をはぐくんだのである（Binford 1964; 425）。より合理的な見通しからすれば、考古学的資料とは、基本的には廃棄物を生み出す行動の反映ではなかろうか。廃棄物については、考古学者が検出にやっきになるのにひきかえ、シピボ-コニボ族のみならず多くの人々が、除去



第8図 2種類の堆積状況における土器片の最大長。

しようとすることこそ奇妙の極である。(Warren R.DeBoer & Donald W.Lathrap 1979)。

《原註》

1. ここでも、また以下の議論においても、シピボーコニボ族の用いる名称は、括弧の中に示されているわれわれは以下の文中と図表において読者の便宜のために英語の名称を用いることにしたが、英語の名称は正確にシピボーコニボ族のそれに対応するとは限らない。(訳註 2)
2. 1971年のわれわれの土器調査にあらわされていない他の器形は、以前は重要であった。これらは、大型壺からビールをくいとるための釣り竿状の器具から、吊り下げられるようにデザインされた、男根や動物を形どった装飾のあるビール杯である (Tessman 1928: table 58)。この特殊なビール杯は、祭の時に、12才以下の子供たちと、祖父母の世代の老人たちによって用いられた。幼児や老人は、村の休息所のそばで用いられる共同のマグによだれを垂らすということが、これらの交代する2つの世代を、ひとまとめにするシピボーコニボ族の理論的な根拠である。
3. この報告で検討された土器製作者のサンプルには表わされていない、白い顔料で質の劣るものはイマリアコチャで取れるといわれている (Lathrap 1973: 172)。
4. 貝殻や角を研磨した土器片が、土器製作の際のスクレイパーとして用いられるということも報告されている (Farabee 1915: 94; George Robertsからの私信による)。
5. 以前には、少女たちの成人式が盛り上がってきたときに供される豚を料理するのに用いられた大型のオラは、彩色されていた。ふだんオラは決して彩色されないので、この習慣は、日常の装飾文法の神聖な逆転として、理解されよう。
6. クマンカヤ文化の考古学的な土器の中で、表面が樹脂加工されたものは、これまで注意されてきたが (DeBoer 1972: 36; Roe 1973: 99)、それが良く残っているのは稀である。顔料は考古学の視覚的な特徴である。赤いうわぐすりをかけられたり、彩色された器や黄土色の突起を付けられたものは、よくウカヤリ川沿いの考古遺跡のごみ捨場に見い出される (例えば、Roe 1973: 96)。イタワナによく似た黒色顔料も確認されている (DeBoer 1972: 18-19)。マオシュという白色顔料をシピボーコニボ族が利用するのは、きわめて変則的であり、この低い使用頻度は、この顔料の考古学的な出土量を少なくしている (Myers 1972: 80-81)。
7. Lathrap (1970C) は、旅行者のために作られる土器は、彼ら自身が用いる土器と簡単に区別しうることを指摘した。
8. 伝統的なシピボーコニボ文化において、土器の使用頻度に影響をあたえる主な集まりは、少女達の成人式であった。1955年以前、半分以上の土器の生産と破損は、それを余儀なくするこれらの儀式と、遠方の友人や親戚達との交歓によって生じたものであった。これらの行事に用いられる全ての土器は真新しいものでなければならなかった。儀式にとって、直接的に重要性をもつ首長家族の世帯にある多くの器は、ふだんの10~20倍に達した。ほとんどのビール杯と盛鉢は、習慣的に祭の3日間、特に成功した際の絶頂におこる酔っぱらいの大騒ぎの間に、こ

わされてしまったようだ。特別な意味のある行事において、英米人がシャンペングラスを床に投げつける気風と同様に、これらの土器は、投げつけられた。しかし、この報告の基礎となつた観察事実が収集された1971年頃までには、成人式の儀礼は、過去の遺物となっていた。

9. 第4表は、その用途が観察されたすべての器に関する情報を含んでいる。このサンプルは、表3図の調査で表にされた土器と完全に対応するものではない。

10. この使用法は半世紀前にテスマン Tessmann (1928:146) によって報告されている。

11. 死者が使用していた土器をなげつけてこわす伝統も例外的な事例となる。家屋の床下に埋められた大型のオラあるいは壺の中に、死者を入れるという一般的な埋葬様式は、もうずっと行なわれていない。今日では、死者は木製の棺か、蓋をしたカヌーに納められ、特定の共同墓地に埋葬される (DeBoer 1972: 65-68)。

12. シピボーコニボ族も、容器以外の幾つかの土製品を製作する。その一つとしてシェルベナンテ *shärvenante* という長方形か橢円形の塊で、伝統的な成人式の儀礼である陰核切除 clitoridectomy を終えた後の少女の陰門に插入される。シェルベナンテは儀式のために作られるもので、短期間少女に使用された後、村のごみ捨て場に廃棄される。この土製品は、非儀礼的なものよりも、儀礼に伴うものの方が、長く使用されるという一般的な見解に対する、一つの例外である (Schiffer 1972: 163)。

13. 峡谷が埋まってしまうというのも、理由のないことではない。清掃された広場からの排出物のすべてが集中する。峡谷の底の方にある3、4本の浸食溝の成長は、きわめて急激である。もし、この浸食が阻止されないならば、広場の全体は、1、2年のうちに開析されてしまうだろう。これらの浸食溝に投げ込まれた木の枝や、大きな土器片や、その他の残骸は、沈澱物を安定させたり、浸食を妨げるのに役立つ。

14. 人間活動の度合と、土器片の碎かれる度合とを相互に関係させようとした試みは、他に、Meggars and Evans (1957: 247-48) と、Grebiger (1971: 48) がある。

15. シピボーコニボ族の遺棄された家にどのような残存物があるかについては、デラウェア大学のピーター・ロー Peter Roe と彼の学生達による最近の調査がさらに多くのことを語るであろう。

《訳註》

1. このイントロダクションは、本論文が収められている、「民族考古学 Ethnoarchaeology」の編集者であるキャロル・クレイマー Carol Kramer によるものと思われる。

2. 原註1にあるように、各器形には英語の名称があてられているが、翻訳にあたっては、これを、さらに、国語に直した。マプ・エイテとシラニアは、英訳されていないので、混和材や道具の名称と同様現地語のまま用いた。オラ *olla* は、スペインや中南米で用いられる素焼きの水甕のことである。

3. 「初期的な廃棄」は、破損直後その場に廃棄された状態を指し、「二次的な廃棄」は、人間

の行動によって、破損した場所から、廃棄物が移動させられた状態を指す。

《訳者付記》

本論文は、Warren R. DeBoer and Donald W. Lathrap 'The Making and Breaking of Shipibo-Conibo Ceramics' の翻訳であり、Carol Kramer, editor; *Ethnoarchaeology - Implication of Ethnography for Archaeology*. 1979. Columbia University Press, New York: P. 102-138に収められている。